

条幅部自由参考

7月29日正午必着

明石春浦先生書

石燈茶香清暑後
書窓梧韻晚涼餘

石燈茶香清暑後。

書窓梧韻晚涼餘（鄭炳泰）

橙はこしかけ。ひるさがり、石のこしかけに坐して茶の香を味わい、夕暮、書斎の窓に涼しげな梧桐の風声をきく。

明石幸子書

夜半樟亭驛
愁人起望鄉
潮水白茫茫

夜半樟亭驛
愁人起望鄉
潮水白茫茫

（白樂天）

樟亭驛は杭州の錢塘江畔にあって、觀潮の名所樟樓あり。愁人は旅人、ここでは作者。作者が杭州の役人時代の作か。白茫茫―月光にかすむ。故郷は遙か、望むに由ない。眼前ただ月明に白茫茫たる水面あるのみ。

螢穿濕竹流星暗魚
動輕荷墜露香

螢ほたるはしつちくをうがちてりゆせいくらく穿う濕はけいかをうこかしてついろかんばし竹う流星う暗う魚う動う輕う荷う墜う露う香う

螢の飛ぶのは流星の如くであるが光は弱い。
魚は荷葉をうこかして露を落して香ばしい。

条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

松影和風（司空曙）

松影風に和す

詩にいう、松影風に和して枕にそうて移ると

漢國山河在 秦陵草樹深
暮雲千里色 無處不傷心

（荊叔）

漢國山河在 秦陵草樹深。
暮雲千里の色、處として心を傷ましめざるは無し。

田家（章孝標）

田家 章孝標

田家無五行 水旱卜蛙聲

田家 五行無く 水旱蛙声を卜す

牛犢乘春放 兒孫候暖耕

牛犢 春に乘じて放ち 兒孫 暖を候ちて耕す

池塘煙未歇 桑柘雨初晴

池塘 煙未だ歇まず 桑柘 雨初めて晴る

歲晚香醪熟 村村自送迎

歲晚 香醪熟し 村村 自ら送迎す

眞夏日のひかり澄み果てし 淺茅原にそよぎの音のきこえけるかも（齋藤 茂吉）

漢時の山河は今も昔と変わらず、秦の始皇の陵は草樹が鬱葱としているが、秦漢の英雄は今いづくにありや。千里一望、暮雲蕭条として物淋しく、処として物悲しく処として心を傷ましめないものはない。

半紙部規定課題A

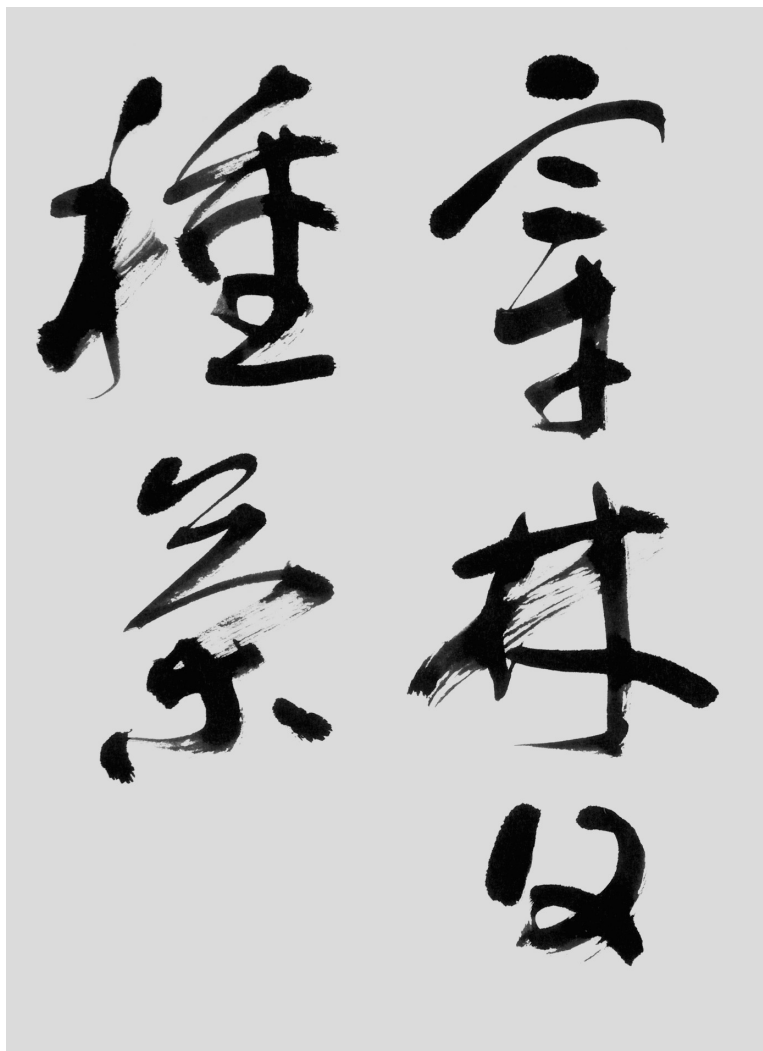
7月29日正午必着

種 穿
茶 林
日

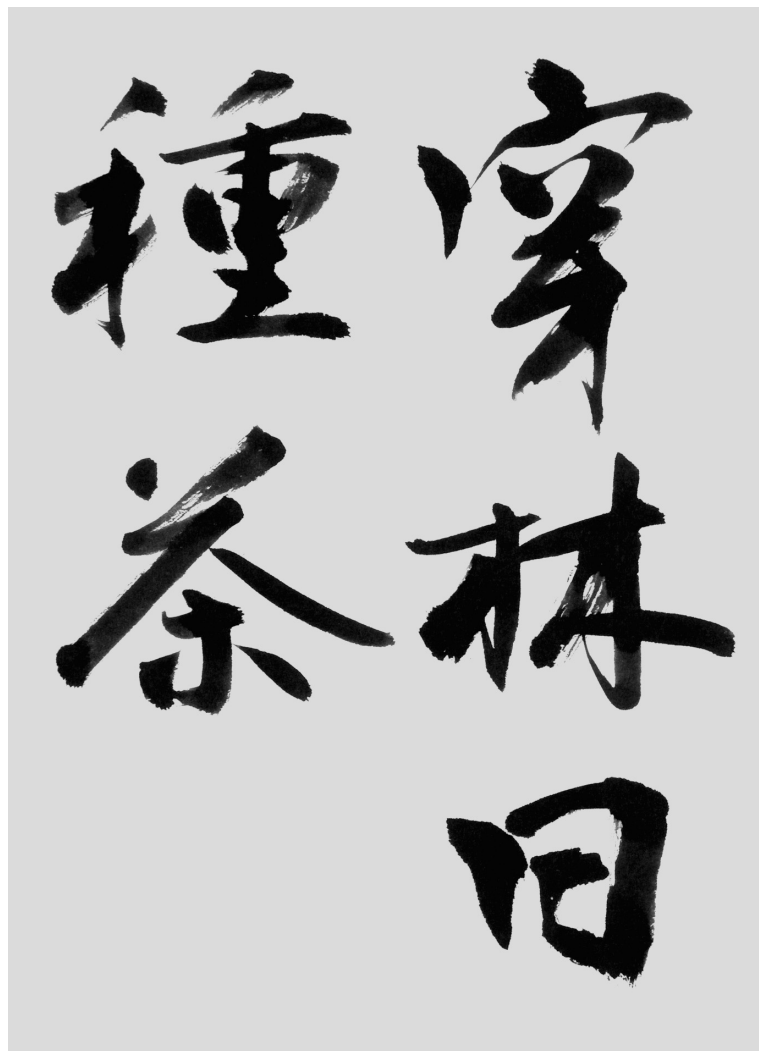
※作品には必ず落款を入れてください。

明石春浦先生書

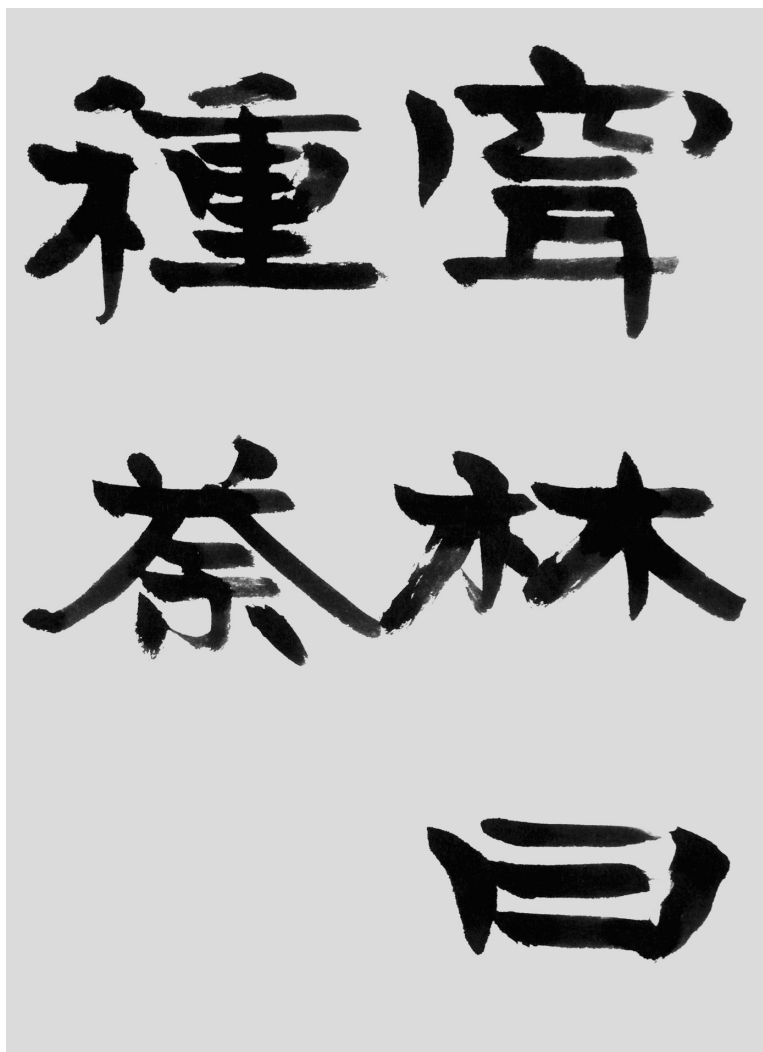
※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。



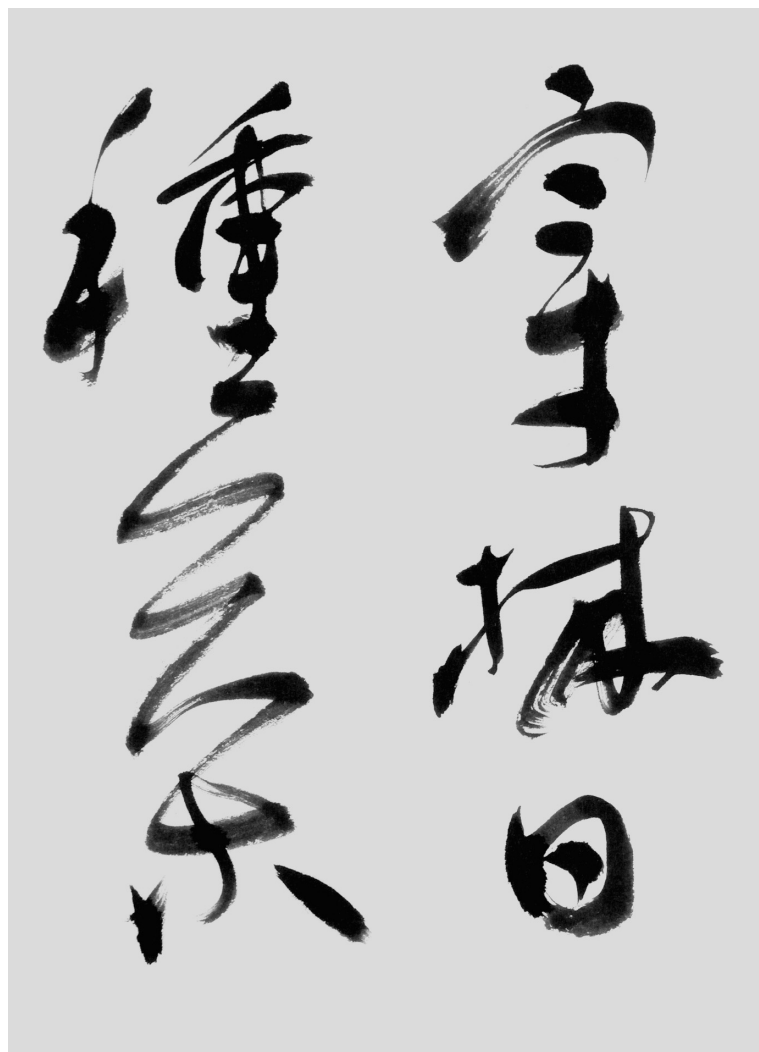
草書



行書



隸書



行草書



篆書

贈「山中日南僧」

張籍

獨向「雙峯」老
松門閉「兩涯」
翻經上「蕉葉」
掛納落「藤花」
登「石」新開井
穿「林」日種茶
時逢「海南客」
蠻語問「誰家」

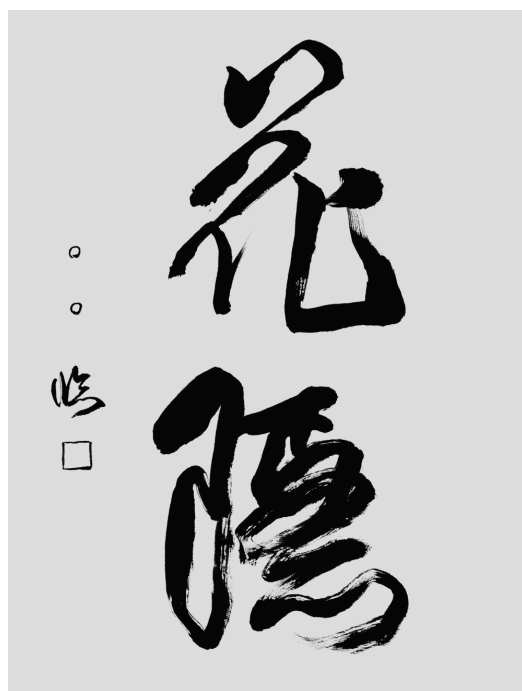
「山中の日南の僧に贈る」

張籍

ひとり「雙峰」に向かっ「て老ゆ」
松門「閉」
経を翻して「蕉葉」に上せ
納を掛けて「藤花」を落す
石を登みて「新」に井を開き
林を穿ちて「日」に茶を種う
時に「海南」の客に逢い
蠻語して「誰」が家かを問う

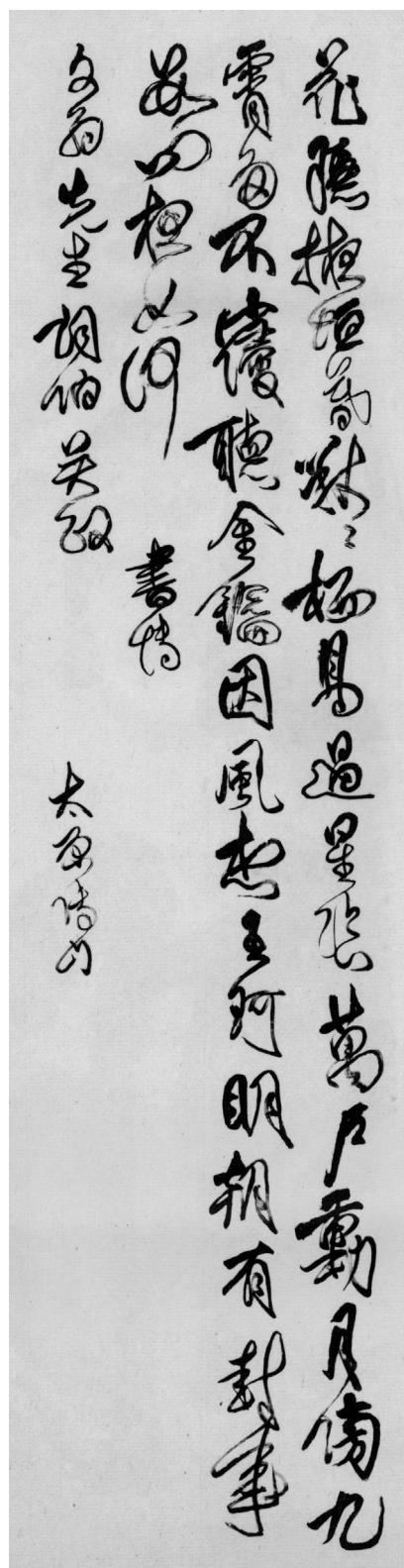
ただひとり双峰に対して過す中に年老い 松木立の中の門は両側よりせまる崖をぴったりと閉ざす
經典を翻訳して芭蕉の葉に書きしるし 袈裟を掛けておくところに藤の花が散りかかる
石畳を敷いて、新たに井戸を開き 林を切り拓いて毎日茶を植えておられる
時折り海の南より訪れる客に逢い 南蛮のことばで誰方かなどとたずねている

7月29日正午必着



花隠(隠)

花隠掖垣暮。啾啾棲鳥過。星臨萬戶動。月傍九霄多。不寢聽金鑰。因風想玉珂。明朝有封事。太原傳山
花のすがたはおぼろになつて宮殿の垣に夕ぐれがおとずれ、ちゅううちゅうと鳴きながらねぐらに帰っていく鳥が通りすぎる。星は千門万戸に向つていっせいに光を
ゆるがしはじめ、月の光は宮殿によりそうてみちあふれんばかりだ。ねもやらずに門を開ける金の錠前の音に耳をすませ、風のさつと吹く音によって誰かが玉珂を
鳴らしながら朝には天子さまに奉る秘密の上奏文があるのでそれが気にかかり、夜の時刻いかにとしばしばたずねてみるのだ。



西 墨濤先生臨書

明末清初 傳山・行書冊

傳山(一六〇七—一六八四) 初名は鼎臣、後に山に改めた。字は青竹、後に青主、仁仲など、別号も非常に多く石道人、六持、不哉庵老人、龍道人など三〇近く知られる。山西陽曲(現在の山西省太原市)の代々学者の家柄に生まれる。身体は頑健ではなかったとされているが、幼少の頃からたいへんな秀才ぶりで、読書をすれば過目たちまち誦をなし、経史諸子および仏道の学に通じ、医術に詳しく、書画にも工で、いわゆる「四寧四母」の説で知られる。その傳山の生きた明朝末期から清朝にかけての書はきわめて特異なものとして光彩を放っている。傳山、王鐸を筆頭に廣道周、張瑞図などの名手達に育まれた「長条幅に連綿草」の表現形式、書風は、彼らが古典を学び、異体字を遣い、鬱勃たる情熱をぶつけ、爆発的なものすこいうねりを伴い新しい書美を生んだ。各々に一脈通じるところはあるが、その独特の筆致はそれぞれの生き方が暗示されている。

傳山は書論の中で「字を作すに先ず人を作せ、人奇なれば字自ずから古なり。」とある。人間ができることが、すぐに「美しい書、魅力ある書」に結びつくとは考えられないが、魅力ある人間像と、ひたすら自身を高め、自身の書を求める努力は当然密着するものと考えられる。

(四寧四母…学問、政治、医術、芸術を繰り返し学び、貫く。)

(春龍)

不復聽金鑰因風想玉珂明
細有封事在如想玉珂

※二行目『有』の筆順は、原本通りに横画から書き出しました。因みに、米芾や張瑄圖もこの筆順で書いたものを残しています。

△倣書参考▽

※この釈文での臨書部門の出品は出来ません。

薰風何処來吹我庭前樹
啼鳥愛繁陰飛來不飛去
于謙詩偶題乙巳夷則放傳青竹筆意書

薰風何処來吹我庭前樹啼鳥愛繁陰飛來不飛去（于謙）

落款

于謙詩偶題乙巳夷則放傳青竹筆意書

○ ○ ○

※青竹：傳山の字

千字文

勅負外散騎侍郎

周興嗣次韻

。 。 寫口

玄和細字用紙

西 墨濤先生書

※用紙サイズ：半紙1/2タテ書き（毛筆）

7月29日正午必着

松永翠舟先生書

三日月

いふは、
いふは、

あつち

三日月の
悲可利
能末耳
利春
ハ可支
於毛
二
ひかりこの
いに
いりやすし
はかなきおもひ
わくとあらぬ
（島木赤彦）

7月29日正午必着

教育部毛筆



あお さんみゃく
青い山脈

中学一年

雨宮春聲先生書



がい こく りょ こう
外国旅行

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



榎戸春龍先生書

あめ あ
雨 上 が り

小学五年



横川春川先生書

ゆた ころ
豊 かな 心

小学六年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

7月29日正午必着



藤田幸春先生書

ほ ら 貝

小学三年



細谷春誠先生書

た き の 音

小学四年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

く も 小学一年・幼年



森戸春濤書

ゆ か た 小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

7月29日正午必着

教育部硬筆

ペン字部

男たちは希望をむね
に七つの海にいとむ

小学五年

夏の夜空にちりばめ
られた無数の星くず

小学六年

自然を守ることは人
間自身のためである

中学

風にのって子供たちのたの
しい歌ごえが聞こえます

一般(級位)

くひな鳴く森ひとむらは木暗くて月に晴れたる野べのをちかた(實明女)

をいかにきこえむらは木暗く
て月に晴れたる野べのをちかた

一般(段位)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。(ボールペン不可)
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

一面の草木をゆら
すさわやかな風

小学四年

五色の短ざくに
ねがいをこめたに

小学三年

とてもさわやかな
なつゆめ明けの空か

小学二年

よぞらをまながれ
るあまの川が

小学一年

あまのわたまつり
あなたばかり

幼年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。(ボールペン不可)
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。